

開拓地からニュータウンへ

千葉県印西市草深^{そうふけ}の船穂開拓団は、千葉県の北部で、利根川の南の下総台地にあった。

戦時中はパイロット養成用の印旛飛行場があったが、戦況が悪化してくると、陸軍航空基地と共用となり、多くの若者がここから戦地に赴いて行った。

戦後、この飛行場跡が開拓地となり、百名余の船穂開拓団が入植してきて、250戸以上を開墾した。しかし、土壌は悪く、肥料は手に入らないので、作物は思うように育たなかった。

初めは陸稲、麦、サツマイモ、ソバなどを作ったが、自給的なものにしかならなかった。地元の農家からは「飛行場の盆栽芋」と笑われた。

1948年に船穂開拓農協を設立し、64年に地元の印西農協に加盟するまで行ったかんがい用水工事などにより、次第に収穫が上がるようになった。

現金収入を得るためにスイカの栽培を行い、トラックに山積みにして市場に運んだ。57年には、スイカで農林大臣賞を受賞する。52年には養豚組合ができ、55年以降酪農や養鶏も始まった。

ところが、67年に「千葉ニュータウン」構想がもち上がり、船穂開拓も予定地に指定されてしまった。このころは高度経済成長の真っただ中で、東京、千葉などの都市が飽和状態となったことから、新たなベッドタウンが必要となり、この辺りが好立地であったため予定地になった。

千葉県と独立行政法人都市再生機構が共同施行することになり、条件などをめぐって団体交渉を続け、69年に売渡し条件が決まった。これに伴い地区の多くの人が出たが、中には土地の半分を譲渡して、残りの半分で営農を続ける人もいた。72年によく諸手続きが完了し、船穂開拓農協は幕を閉じた。

73年2月、これまでの苦労と共に歩んできた仲間への感謝を込めて開拓記念碑が建てられた（写真）。

「千葉ニュータウン」は、入居希望者が少なかったなど様々な問題を抱えながらも、2014年によく事業としては終了した。

現在の草深地区を訪ねてみると、100～200㎡ほどの畑が、団地の中に点在していた。

船穂 12-231-1

- ①調査日 令和7年4月22日
- ②所在 千葉県印西市草深815
- ③地区の沿革
- ④設置年月日 昭和48年2月16日建立
- ⑤設置者 船穂開拓農業協同組合
- ⑥碑文（表面） 開拓記念碑
- ⑦碑文（裏面）

戦火の余●燦る20年秋緊急開拓法の施行により草深飛行場跡250町歩に開墾の鍬が打ち込まれる。入植者は現地除隊戦争罹災外地引揚者で船穂開拓営団と称される。然し不毛に近い土壌と肥料農具種子等の不足により満足な営農はできず作物は陸稲大小麦甘藷蕎麦粟等自給的な物で辛うじて糊口を塗する。

23年10月船穂開拓農業協同組合を設立し組合員は100余を数える。この頃開拓地の配分や測量は完了し耕地は成田道から南北に直角に農道防風林を設置した整然たるものになるが依然瘦地と旱魃による不作に悩まされ飢饉の脅威に晒される。ここに県の指導により●豚乳牛綿羊等の家畜の導入を図り27年以降養豚組合の結成羊毛の共同委託加工牛乳の出荷肉豚の共同販売へと漸次成長する。一方野菜農業の筆頭は西瓜の栽培である。草深特産物をとの組合員の願いと努力により26年船穂開拓農協西瓜部が発足し、今日の船穂西瓜隆盛の基が礎がれる。同年土壌改良地区に指定され県の補助により土壌の改良に着手する。32年西瓜は神田で開催された旭都一都六県品評会で農林大臣賞を受ける。同年人工灌水設備の要望が起り灌水井戸の試掘に成功し33年本格的な畑灌工事が始まり総工費3050万円を以て35年完成する。先に土壌の改良によって荒地を制し今畑灌の工事によって旱魃を制したわけである。換金作物は西瓜落花生大根生姜里芋辣蕪等で殊に西瓜後作の沢庵大根は●場の講評を博する。印西牛蒡の栽培も41年以降盛んになり発祥地の名を馳せる。斯く蔬菜農業が安定し商品作物が確立すると畜産は35年の綿羊の剪毛や牛乳処理所の施工後下降をたどり41年以降一部専業畜産家の手に委ねられる。斯く組合は開拓者資金の転貸業務に合わせ営農指導土壌改良畑灌工事等一連の開拓事業を推進し組合員の経営向上に●めて来たが県の指導により38年印西農協と事業調整し39年加入する。ここに組合は一切の事業を中止し業務の整理に努める。時恰もニュータウン計画が発表され42年開拓地がその予定地に指定されるやニュータウン対策委員会を結成し数次に亘る団体交渉の結果44年暮北総開発局との間に土地譲渡覚書が調印され●そ80余戸の組合員は現所有地を売り渡し営農地へ移転することになり47年度内に完●する。愈々開拓業務の完了を見組合を解散するに当り後世にその足跡を残す可く茲に之を建てる

昭和48年2月16日建立 船穂開拓農業協同組合

⑧現在の状況

原集会所敷地内に建立